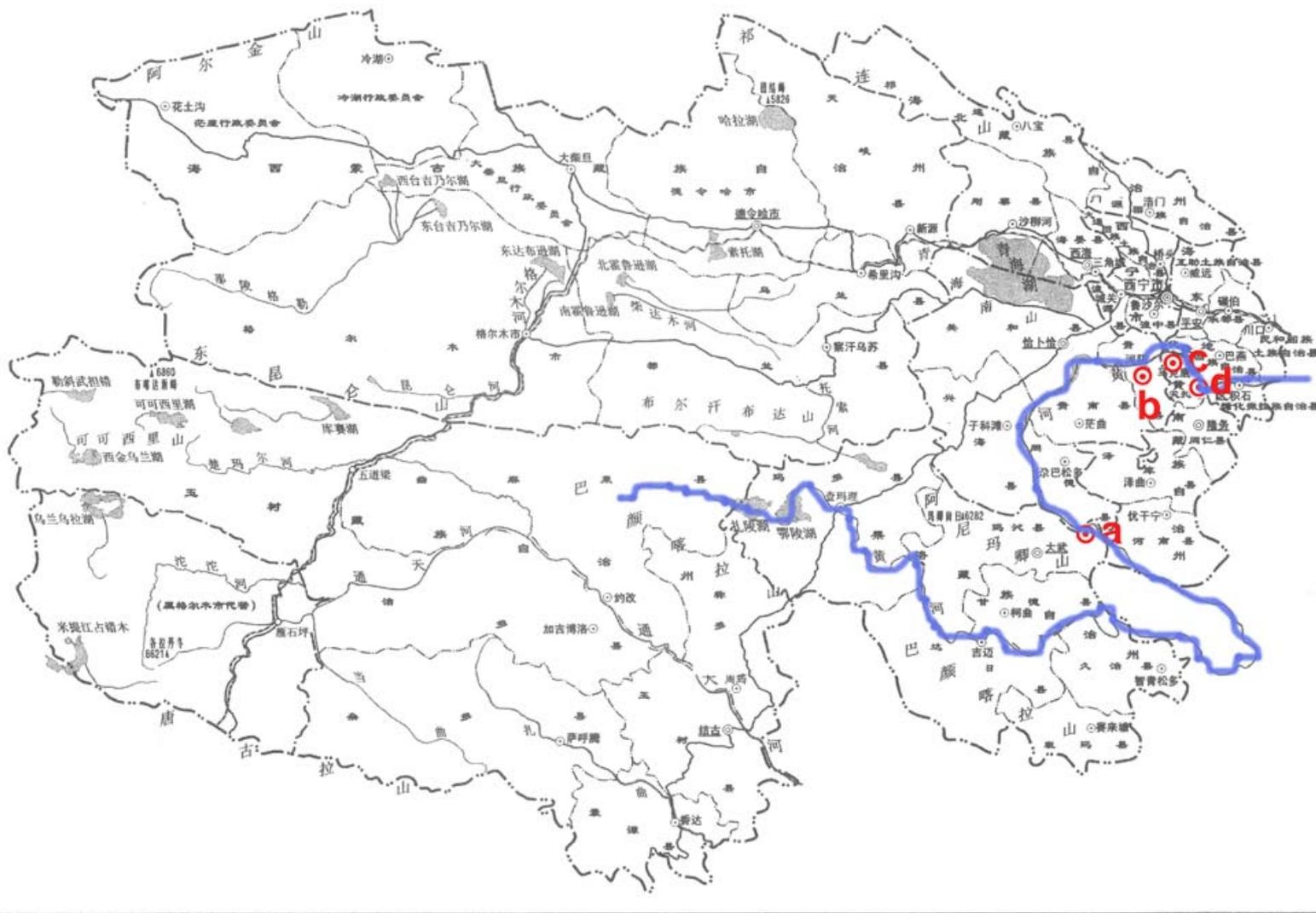


チベット ヘリテイジ ファウンド

黄河流域チベット人集落における修復事業現場 2003-2007年度



青海省の地図です。青線で示したのが黄河の流れです。
アルファベットで示したところがTHFの黄河流域活動現場です。

a. ラギャ僧院

青海省果洛藏族自治州玛沁县拉加寺

青海省の省都西寧市より約360km、バスにておよそ8時間の道のり、拉加寺前にて下車。

b. ラゲン集落

青海省海南藏族自治州贵德县大史家村四队

西寧市より約120km、貴徳県までバスでおよそ2時間強の道のり、バス停からタクシーで10分でラゲン集落に到着。

c. ナムゾン石窟寺院

青海省黄南藏族自治州尖扎县坎布拉镇南宗寺

西寧市より約130kmの李家峡でチャーター車に乗り換え山道をおよそ40kmで寺院前に。
または、貴徳県よりチャーター車で黄河沿いの山道を約1時間半で寺院前に到着。

d. セルカン寺院

青海省黄南藏族自治州尖扎县昂拉乡赛康寺

西寧市よりおよそ130km、バスで尖扎県まで約二時間強、県からタクシーにて約15分で寺院前に到着。



a. ラギヤ僧院

僧院の歴史は18世紀に遡り、ラサのセラ僧院の仏教教育システムを導入し、5つの学院から成る言わば仏教総合大学。仏教哲学を学ぶツェンニ・ダツァン、密教を学ぶギユパ・ダツァン、チベット医学を学ぶメンバ・ダツァン、天文学を学ぶギンコル・ダツァンとセラ寺院の守護神を祭るタムジン・ダツァンにて約500名の学僧が仏学に励んでいます。各学院ごとに各々のカリキュラムをこなし、時には寺院全体の宗教行事も行われます。

左上部の写真は僧院内部よりラギヤ僧院の守護神であるアミ・キュンゴルを望む、黄色い建物は僧院の大厨房で全体行事の際に僧へ支給される食事を作る場です。時にはヤク丸々一頭、羊五匹を大鍋まで煮込んだ料理が当番の僧や施主の家族により豪快に作られます。また、夏の期間は新鮮なヨーグルトが届けられることもしばしばで、何とも遊牧地帯らしいものです。



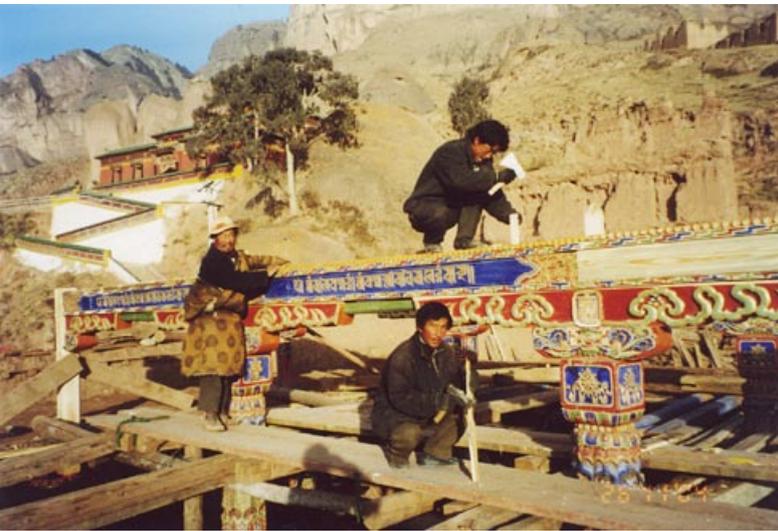
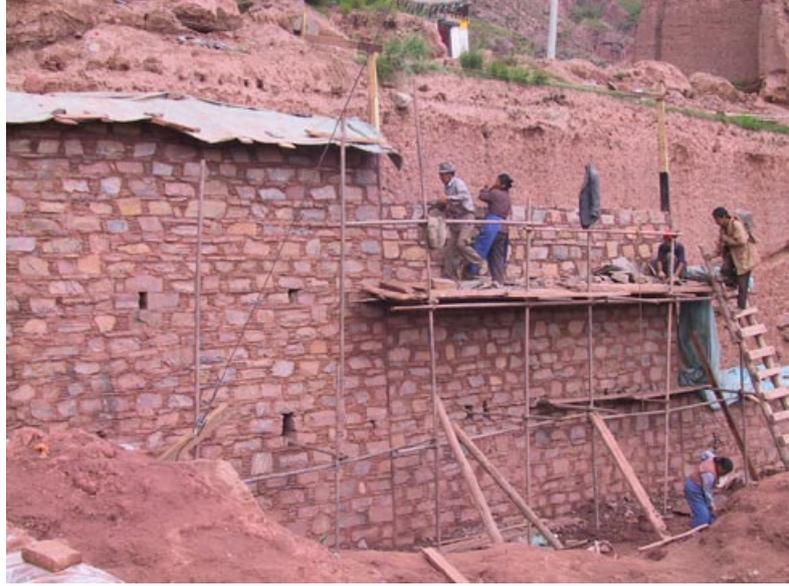
左の写真はアミ・キュンゴルの山頂から眼下に広がる景色です。僧院から頂までは約2時間ほどの登山の行程です。山頂付近にはチベットのお香として使われるビャクシンの原生木が茂り、ほのかな心休まる香りが漂っています。また絶壁を伝わり吹き上げる上昇気流に乗り大きなワシが旋回しつつ登ってき、時にはその翼の風をきる音が聞こえるほど近くに接近してきます。

下の写真は僧院の裏山からのパノラマです。山裾に広がる大僧院と遠目に望む黄河の悠々とした流れが美しい。僧院生活の朝は早く、朝日が川面を輝かす頃には読経を終え僧舎に向かう袈裟姿の僧、巡礼路をめぐりお香を焚く巡礼の者をよく目にします。



ラギャ僧院での修復現場の風景です。THFは2棟の建物を修復しました。いずれも建材を伝統的な工法を生かして、歴史的な部材を最大限使って丁寧に修復工事を進めます。遊牧地とあって工事に携わる人手不足は僧院の協力を得て、学業の休憩時間に若い僧にボランティアで手伝ってもらいました。

経験豊かなチベット人の職人が中心となり、大工、石工、絵師などの専門職人をチベット、青海省各地から募り、修復工事にその技術を揮ってもらいます。



上の写真はチベット特有の屋根工事の方法です。アルガと呼ばれる石灰質の鉱物を山から採掘し、それをそら豆から子供のこぶし大の大きさに砕き、屋根に敷き詰め散水しながら搗き固めていきます。大きな屋根ではその工事が数週間にわたり、その単調で長い作業を遂行する為に、唄を歌いリズムカルなステップを踏んで工事を進めます。歌と踊りの大好きなチベット人らしい働き方です。



左上は密教学院の修復前の写真。

左側が修復後の写真です。



右上がジョカン堂修復前の状態で、左側が修復後の写真です。



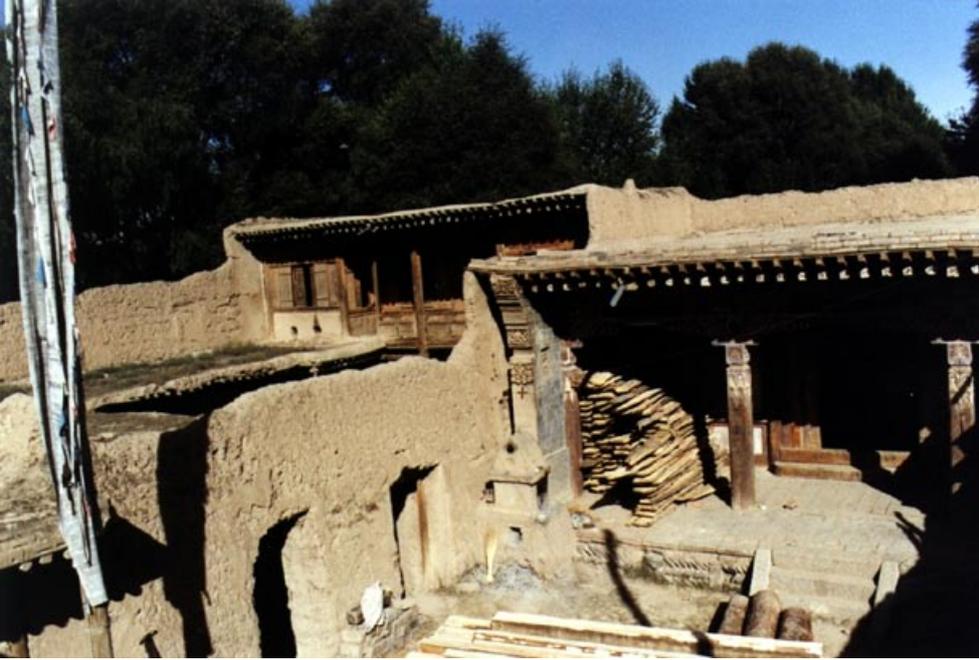
修復前は構造体の老朽化によりその倒壊性が危ぶまれ、当地の政府より建物使用禁止の令が出ていました。密教学院は2005年に、ジョカン堂は2006年に修復工事を終えラギャ僧院に正式に引き渡しました。歴史的文化的価値のある建物が、再生して引き続き人々に利用されて行くことに修復事業の重要さがあると思います。

b. ラゲン集落

ラゲン・マニカンは貴徳盆地にあるチベット人集落の宗教活動の場です。貴徳盆地は黄河がもたらした肥沃な堆積土と穏やかな気候の為農業が発達し、チベット人、漢人、モンゴル人と回教徒といった民族の雑居地帯です。特にチベット仏教は出家せずに世帯を持ち農作業などの生産活動に携わりつつ密教の教えを師より受け継ぐ密教居士の伝統がいまだに見られます。この教えは普通チベット仏教古派であるニンマ派に基づいて在家修行に励みます。大僧院の体系的な修学法とは異にしますが、農業という人手の必要な地帯にはその生産性から離れずに修学する合理的な方法だったのでしょう。マニカンはまさに真言師の集まる活動の場所なのです。主なる管理と運営は集落によって分担されています。共同の宗教活動または祭事など集落の活動の場として機能しています。

左上は修復前の状態です。文革時に生産隊の食料倉庫として利用された為破壊を免れましたが老朽化でかなり傷んでいました。

左が2004年の修復後の写真です。マニ車を村人が新調し取り付けました。朝夕にはマニ車を回しお香を焚きに村人が訪れます。



下の写真はチベット新年を祝う集落の集まりです。日本の盆踊りのように輪を作り踊るゴウジュアンという踊りで祝います。右の写真は密教居士による読経の様子です。小さな居士には伝統を学ぶ勉強の場でもあります。



ラゲン・チョルテン(仏塔)の再建



ラゲンは古くは貴徳盆地の中心に位置する集落として栄えチベット人を主体とした社会が発展しマニカンの他にもジョロン寺、史家寺と言った寺院が建立されました。また3つの仏塔が集落内にありましたが、すべて文革時に破壊され今はその痕跡も見られません。

過去の度重なる移住民の増加により、現在では少数派となってしまったチベット人のアイデンティティ回復のために仏塔の再建は村人達の切なる願いでした。THFはラゲン集落の住民と協力し、地上15メートル高の石造の仏塔の再建に取り掛かりました。村民は主に仏塔内に納める各種仏具の制作を担当しています。特にツァツァと呼ばれる型抜き粘土仏像を十万体を各世帯分業で制作しました。2007年度までに約三分の一の構造を積み上げました。



写真は左上より、地鎮祭を執り行い仏塔の中心を取ってその下に五穀やバターを入れた壺を埋めるところです。

左は仏塔の上部に組み上げる十三相輪の一部です。左下は総石造の仏塔の下部です。熟練の石工により一段一段積み上げていきます。

下は粘土仏像に金粉を塗り、一体一体に目口を入れています。十万体を完成させるまでには気の遠くなる作業ですが2007年度に仕上げ、今仏塔に納まるのを待っています。





c. ナムゾン石窟寺院

貴徳盆地を流れ出た黄河は峡谷へと流れ込みその谷間は長年の侵食により形成された複雑に入り組んだ地形へと誘います。ここが坎布拉国立森林公園の中心にあるナムゾン石窟寺院です。その変化にとんだ畸形と辺鄙な位置の為、修身瞑想の修行場としても有名です。（上の写真中央左よりに白い点がある峰にナムゾンがあります。）

左の写真は石窟を覆う木造の堂で、1980年代に宗教信仰の自由が認められた後に、村人が当時の限りある資材で再建したものです。

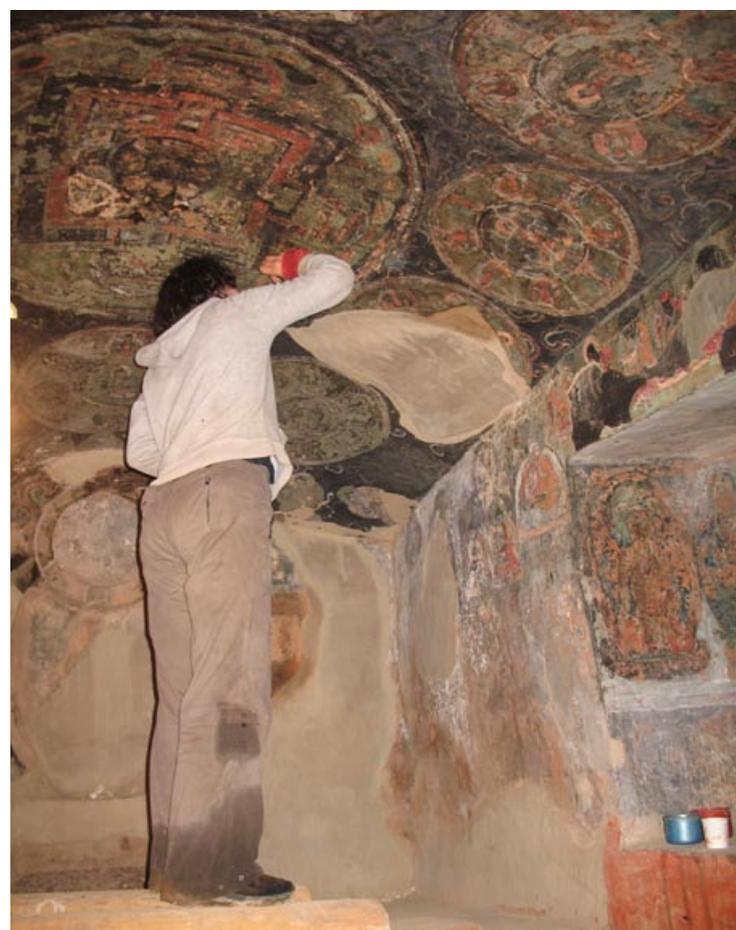
下の写真は3つの石窟の内の一つで9世紀に中央チベットの仏教弾圧から避難した仏教学者ケパメ・スム（三賢者）の塑像が奉られています。



石窟は山の頂に位置し、急勾配の登山路の為、全ての資材は麓で粗加工し人力で運び上げました。村民の協力なしには叶わぬ再建事業だったでしょう。

職人と技術者は毎日40分かけて登頂し、構造の組み立てと壁画の修復作業に取り掛かります。昼ごはんも朝方まとめて作り、現場まで持ってあがります。眼下に広がる雄大な景色を眺めながらの食事は実にうまい物です。

今回の事業でお堂は創建当初の規模に再建されました。



壁画の修復にはドイツからの技術者を招聘し、特殊な薬剤を用いクリーニングを主体とした作業を行いました。長年煤の下に埋もれていた色鮮やかな壁画の像が現われました。



完成したナムゾン石窟寺院の写真です。美しい木彫刻をほどこし白木で見せる立面はこの地方特有の建築美です。バルコニーからは雄大な景色が眺望できます。仏教復興の聖地としてこれからも多くの人々が巡礼の詣で、瞑想修行の場として修行者に利用される事と思います。





d. セルカン寺院

セルカン寺のあるナンラ郷はアムド地方で三指に入る風光明媚な農村として知られ、チベット人を主体とする幾多の集落から形成されています。古くはナンラ千戸長と長とする8つの部落連合体、ナンラ八庄として大きな影響力を持ちました。現在も千戸長の一族はここに生活し村の決め事には、ある程度の指導力を持ち合わせています。

セルカン寺は14世紀に三世仏をまつるお堂として建立されたセルカン(金堂の意)に始まりその後ナンラ部族の信仰の場として栄えます。18世紀にはナンラ千戸長の家系よりラブラン僧院の大活佛ジャミヤン2世を輩出し、当時大規模な拡張工事がなされほぼ現在の規模に発展しました。城壁に囲まれた境内には、お経を上げる経堂、土地の神を奉る堂、弥勒菩薩堂、密教居士のマニカン、その他当地の有力な活佛の邸宅によって構成されています。僧院というよりはナンラ部族の信仰と活動の場として利用されています。

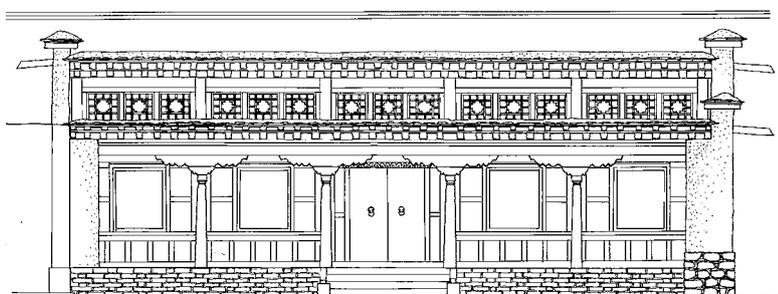




THFは2007年度までに境内の10ある建造物の内、ユルラカンという地元の守護神をまつる堂の構造工事をほぼ完了し、セルチ活佛の邸宅であるセルチ・ラブランの構造工事に取り掛かりました。また金堂内の壁画の修復のためにその記録作業を完工しました。

その他の建物においては木材、日干し煉瓦、屋根瓦等、大方の資材の準備を行いました。

今年度は境内最古のセルカン（金堂）を中心にその他の建物とその周辺工事を実行する予定でしたが、今年度のチベットの情勢により、6月現在修復工事再開の目途が立っていません。早期に事業が再開できるのをナンラ郷の人々共々願っています。





セルカン寺での日常の一コマです。

